

感覚のアーキペラゴ：脱（健常）の芸術とその記譜法

2018年度活動報告

本研究では、「障害者」の創作行為を作品として美的に評価することよりも、その作業や技術が当事者の生活にとってどのような意味を持つのかを重視する。そのため、当事者の生の文脈（人・モノ・環境）と創作の相互作用のメカニズムを明らかにする。その目的は、作品に「障害」というラベルを貼りつけることで、社会的弱者という分断領域に閉じ込めることにはなく、作品から排除された余分な「騒音」や「異物」を取り戻すことにある。また、「障害者」の独特の感覚の論理・思考が、「個の精神や身体の特性」にのみ還元されるのではなく、他者や環境など多様なネットワークとの相互触媒的な関係から成熟してゆく創造的な共有プロセスとして捉えることにある。上記の目的を達成するため、以下の2点を研究期間内に明らかにする。

（１）「関係的な領野」の記述～^{もつ}縫れと巻き込み

障害者達の創作実現のプロセスを、施設サポートスタッフのひとり「乱反射する関係」と呼ぶ。当事者の日常生活での、ひっかかり、こだわり、つまづきなどの出来事がキッカケとなり、複数の他者や環境との出会いから素材・道具が選ばれ、触れる・撫でるなど身体感覚を伴う確認や、反復的な行為を経て、一つの技法へと定着してゆく。そこでは、複雑に縫れたネットワーク（関係的な領野）が形成されている。「作品」を縫れの中で捉える時、それらは、他者への手紙や贈り物、自分のためのお守り、日記、時刻表など生の文脈に接続された指標の様相を帯びたモノとなる。それは、美的イメージにとどまることなく、視覚、運動感覚、音、身体、時間へ働きかけ、当事者と我々に作用する騒音や異物を含みこんでいる。本研究では、他者や環境をも巻き込んだ縫れのネットワークを解きほぐして外部から観察するのではなく、観察者自身も、その縫れに巻き込まれながら変化してゆく記述の可能性を探ることにする。健常へと方向づけられたパースペクティブからではなく、健常/障害の分断線を折り曲げ、複雑化する多元的な世界へと向けた記述法である。

（２）Art- Documentation～記録/展示の新たなモデル

完成された作品（Art-Works）を現場の文脈と分断して記録・展示するという従来の手法ではなく、生の環境を多感的に捉えた記録や「関係的な領野の記述を含む創作」（Art-Documentation）としての提示法を構築する。ここでの「Art-Documentation」とは、ドキュメンタリー映像の作成や、博物館での「資料」の解説、インタビューなど言語を軸とした客観的記述を目的としたものではない。イメージ、文字、空間、音声など身体に作用する複合的なメディアムを使用することで、鑑賞者の言語的理解だけではなく、多感的で情動に働きかけることに重点を置いたものである。一般的な展示の場面では、「美的鑑賞」のために作品との適正な距離が設定され、平らな壁面にそって鑑賞者の目線の高さに合わせて作品を並べ、解説やキャプション（タイトル、素材、制作年など）で粹付することで、一つの物語が構成されてゆく。このように構築された展示・鑑賞方法からは、視覚を手の触覚のように極端な近距離で使用し、小さな声

をつぶやきながら確認し、道具やモノを独自のルールで規則的に机上に並べ、日記のように切れ目なく日々繰り返される作業、そのような創作の現場での縫れのネットワークが消失している。本研究では、当事者の生の文脈に鑑賞者をも巻き込み働きかけ、多層的な経験を創出する提示方法「Art-Documentation」の構築を目指す。

高橋 悟（美術学部教授）